

『社会科における役割体験学習論の構想』

NSK出版、2002年、437頁、¥11,000

井田 仁康*

社会科に限らず、現在の学校教育では、生徒が主体的に取り組める学習、体験的な学習といったものが推進されている。それが「生きる力」と密接に関わってくるという考え方である。そこで注目されてきたのが、シミュレーション、ロールプレイングといった学習方法である。そのような流れの中で、著者は公立学校の小・中学校の教師を経験した上での教育の反省と問題意識を追及するため、職を辞して上越教育大学大学院、筑波大学大学院で研磨を重ねた。著者の研究は、学校の意義を問い直し、社会科の教育内容の主軸である「民主主義」「人権」を学校の中でどう教えていくのか、そのための学校のあり方、教育のあり方はどうあるべきかを探究している。そして、そのような教育哲学に基づいた教材研究をいかに学問的に高められるかが著者の課題でもあった。その結果が、博士論文となった本書である。

著者の問題意識は、教育現場からでてきたものであり、いわゆる文献の蓄積によってでてきた問題意識とは異なる。従来、このような問題意識に基づく課題は、純粋な学問とはみなされず、博士号の学位論文とはなりにくかった。むしろ、通常の教材研究の延長と位置付けられてきた。そのため教育学では、学問と現場の乖離が強く指摘されていたのである。本書は、そのような従来の概念を打ち破り、現場の問題意識が学問となりえることを実証したのである。現場の課題、教材研究が学問にまで高められなかった大きな要因は、教材を吟味する理論的背景の欠如と、毎日多くの実践が行われているにもかかわらず、従来の実践が活かされない換言すれば蓄積を整理せずにその実践が教育の中でどのような位置付けになるのかを検討してこなかったことである。換言すれば、本書は「役割体験学習論」として理論的背景を確立し、著者が開発した実践を多くの実践を整理しながら位置付け、著者の実践のオリジナリティーを明確にしたのである。

このように学問的な研究にすることによって、逆にその日その日の教材研究に追われている現場では、すぐにでも教材に使える文献とはなりえず、意味がないように思われるかもしれないが、それは誤った考え方だと言わざるをえない。教師としてどのような信念に基づき教材を作成するのか、それはどのような理論や研究の蓄積によって作成された教材なのかを時間をかけて読み込むことは、自己の教師としての内面的な資質を高めるとともに、教材に関する見方も深くなり、学校、生徒への貢献も大きくなる。逆に、本書のような学問的な書を読まないで、日々の教材研究を進めていっても、表面的なその場をしのぐ域を越えることはできず、結局は自分にとっても生徒にとっても、時間をかけて教材研究しているわりには得るものが少なくなる結果となる。

本書の構成をみると、序章で本書の研究目的、研究方法が述べられ、第1章、第2章で理論的背景の検討が行われる。第1章で従来の学習論の批判的検討がなされ、第2章ではそれらの批判を踏まえ、本書での「役割体験学習論」が提示される。第3章では従来の役割体験に関する実践の整理をし、第4章ではそれらの蓄積された実践を踏まえて、理論に基づいた著者の実践を展開し、検討を加え、この実践の役割体験という観点からみた位置付けをおこない、オリジナリティーを明確にする。終章で研究のまとめ、課題が提示される。さらに、資料がつけられ、著者

の開発した教材を読者が用いることもできる。また、この実践を通しての生徒の感想も載せられている。

読者は、資料に載せられている教材を使って、模倣的に授業をすることにはあまり意味はない。著者は自分の理論に基づき、様々な実践を検討した上で、自分の実践を作り上げた。他の人が、その理論や従来の実践を検討せずに、その教材を借用したとしても、問題意識もなく使用するので教材の効果は半減する。自分なりにその教材を使う意義を問い直し、問題意識、課題を明確にした上で、生徒の実態に応じて工夫を凝らしながら使っていかなければ効果は上がらない。

本書を読むにあたって、著者の性格を知っておくことは、本書の関心を増すことになるだろう。著者の秋田大学で教鞭をとる井門さんは、熱血漢であり、バイタリティーがある。正義感も強い。「もうちょっと冷静になってよ」ということもたびたびある（あった）が、そのような情熱が、現場からの問題意識を博士論文という形で、高い学問水準まであげてくれたのであろう。また、情熱家は、愛情家でもある。家族に対する愛情、生徒に対する愛情がこのような仕事を精神的にも支えたのである。本書の「謝辞」では、そのような愛情の文章に溢れている。学問に対する情熱、それは家族をはじめとする人間に対する愛情と深く関わっていると認識させる本書である。